



写真提供：東京大学総合研究博物館



令和6年度
加曽利貝塚E地点・B地点発掘100周年記念シンポジウム

加曽利E式土器の再検討

日時 令和6年11月23日（土・祝）・24日（日） 主催 千葉市立加曽利貝塚博物館
会場 千葉市生涯学習センター 2階ホール 共催 千葉市生涯学習センター

写真提供：東京大学総合研究博物館



令和6年度

加曽利貝塚E地点・B地点発掘100周年記念シンポジウム

加曽利E式土器の再検討

プログラム

1日目 11月23日（土曜日・祝日）

9:20 - 9:25 挨拶

9:25 - 9:50 【趣旨説明】千葉市・加曽利貝塚博物館の加曽利E式土器研究の流れ
千葉市立加曽利貝塚博物館 青笹早季

9:50 - 10:10 【前提説明】加曽利E式土器の細分になぜ混乱が生じたのか？
大村裕（下総考古学研究会代表）

10:10 - 11:10 【基調講演】縄文中期加曽利E式土器の型式編年と年代
小林謙一（中央大学文学部教授）

11:20 - 12:20 山内清男の加曽利E式土器と「中峠式土器」
大村裕（下総考古学研究会代表）

13:10 - 14:10 房総の加曽利E式期前半の土器について
館祐樹（（公財）千葉県教育振興財団文化財センター調査第一課）

14:10 - 15:10 南武蔵・相模における加曽利E式「古い部分」～その細別観点と表記について～
黒尾和久（国立重監房資料館）

15:25 - 16:25 関東地方北東部における加曽利E式出現期の土器様相
塚本師也（益子町教育委員会生涯学習課）

16:35 - 17:00 質疑応答・討論

2日目 11月24日（日曜日）

9:30 - 10:30 房総の曾利式系土器ー加曽利E3式に伴う斜行文・重弧文土器を中心にー
大内千年（千葉県教育庁教育振興部文化財課）

10:30 - 11:30 房総の連弧文（系）土器について
大網信良（（公財）東京都教育支援機構東京都埋蔵文化財センター調査研究部調査課）

12:30 - 13:30 下総台地における加曽利EⅢ・Ⅳ式土器の編年学的研究の現状と課題
加納実（千葉県教育庁教育振興部文化財課）

13:30 - 14:30 房総における中期末葉から後期初頭の土器様相
小澤政彦（（公財）千葉県教育振興財団文化財センター調査第一課）

14:45 - 15:45 加曽利E系列の土器群（続）ー加曽利E式の堀之内式への継承ー
稲村晃嗣（株式会社四門文化財）

16:00 - 17:00 質疑応答・討論

ご来場の皆さまへおねがい

講演中の画像・配付資料等を、許可無く複製・撮影や、インターネットへアップロードすることは
ご遠慮ください。

趣旨説明 —千葉市・加曽利貝塚博物館の加曽利E式土器研究の流れ—

千葉市立加曽利貝塚博物館 青笹早季

2024年は、大正13（1924）年に東京帝国大学人類学教室による加曽利貝塚E地点・B地点の発掘調査が行われてから100年目にあたります。この調査は、場所によって出土する土器に違いがあることを認識する契機となった画期的な調査で、後の縄文土器研究の進展に大きく寄与しました。この点をふまえ、今年度を発掘調査100周年と位置づけて、加曽利E式土器研究の現在とこれからに焦点を当て、年間を通して様々な催しを企画しました。本シンポジウムは、その一環となる事業です。

1 加曽利E式土器と企画展について

加曽利E式土器は、縄文時代中期後半に、関東地方を中心として広く流行した土器です。「加曽利E式」という名前は、1924年の調査で設定した「E地点」という調査区の調査成果に基づいて名付けられました。このことから、加曽利貝塚は、加曽利E式土器の「標式遺跡」と呼ばれ、全国的に広く知られた遺跡となっています。

加曽利貝塚博物館（以下 当館）では、平成30（2018）年度以来、加曽利E式土器を主題とした企画展「あれもEこれもE—加曽利E式土器—」を連続して開催いたしました。令和5（2023）年度までの6年間に房総半島全域を網羅し、111ヶ所の遺跡から出土した土器を延べ389点展示しました。県内を千葉市域、印旛地域、北西部地域、内房地域、外房地域と大きく5つの地域に分け、千葉市内のみ2回展示を行いました。中でも、令和3（2021）年度の千葉市内の展示では、加曽利E式土器の終末から、次の時期への変換期の土器に注目し、いまだ議論の帰結をみていない「加曽利EⅤ式」とされる資料の展示にも踏み込みました。

2 加曽利貝塚E地点・B地点について

加曽利貝塚についての発掘調査は明治40（1907）年に初めて行われましたが、当時の調査の目的は、人類学的な視点に基づく古人骨の収集でした。その後、考古学的な視点に基づく調査の必要性が徐々に考古学会に浸透していきます。特に重要とされたのは、土器の変化の過程を論理的に構築する型式学と、地層の上下関係でその新旧を判断する層位学です。

こうした考古学的手法を用いた加曽利貝塚での初めての発掘調査が、大正13（1924）年に東京帝国大学人類学教室によって行われた調査です。このとき、広大な遺跡の中にA～Eの5地点を設定して調査が実施されましたが、測量技術が未発達だったこともあり、その正確な位置は特定できていません。

近年、千葉市教育委員会と早稲田大学が共同で地中レーダー探査（GPR）調査等を行った結果、B地点は南貝塚の西側（現在の南貝塚貝層断面観覧施設の周辺）、E地点は北貝塚の東側（坂月川を望む貝層東斜面）と候補地を絞ることができました（第1図）。これまでもおよその位置は推定されていましたが、



第1図 加曽利貝塚調査区

最新の調査手法によって候補地が絞られたことは、加曽利E式土器の学史的価値を補完する研究成果といえます。

大正13（1924）年の調査で、B地点とE地点から発掘された土器群が、D地点では地層の上下に分かれて出土したことにより、土器の新旧関係を捉えることに成功しました。縄文時代の人々が、時期ごとに異なる特徴の土器を作っていたことが証明され、その後の縄文土器の編年研究を発展させました。

この発掘調査で加曽利貝塚E地点から出土した土器は縄文時代中期後半の「加曽利E式土器」、B地点から出土した土器は縄文時代後期中頃の「加曽利B式土器」と命名されました。山内清男は、発掘調査の15年後に出版された『日本先史土器図譜』の中で、典型的な標本資料として加曽利E式・B式土器の特徴を詳しく記述し、全国の研究者に伝えました。

このような経緯をふまえ、加曽利貝塚E地点・B地点発掘100周年を記念し、「加曽利E式土器の再検討」と題したシンポジウムを開催することにいたしました。

前述のとおり、加曽利E式土器研究の経緯と現状を再認識すべく、当館では平成30（2018）年度から、企画展「あれもEこれもE—加曽利E式土器—」を開催いたしました。今年度はこれまでの成果をふまえ、総括として「あれもEこれもE—加曽利E式土器（総括編）—」（会期 令和6（2024）年10月8日から令和7（2025）年3月2日まで）を開催しております。

本シンポジウムは、この「総括編」の一環と位置づけており、これらの成果は今後の博物館機能の充実をはじめとする、特別史跡加曽利貝塚の整備に活かしてまいります。

註

(1) 「加曽利」「縄文」の表記について

縄文時代の研究では、各研究者の研究方針によって「加曽利」と「加曾利」、「縄文」と「縄紋」の表記が混在して使用されています。千葉市では、常用漢字の「加曽利」「縄文」を使用していますが、本シンポジウムの各講師の講演や予稿集の文中では、講師の研究方針に沿った表記としています。

参考・引用文献

山内清男編1939『日本先史土器図譜』先史考古学会

千葉市教育委員会2017『史跡加曽利貝塚総括報告書』

高橋龍三郎ほか 2022「第5次加曽利貝塚デジタル三次元測量・GPR レーダー探査調査概報」『早稲田大学文学研究科紀要』第67輯

高橋龍三郎ほか 2023「第6次加曽利貝塚デジタル三次元測量・地中レーダー探査（GPR）調査概報」『早稲田大学文学研究科紀要』第68輯

第 1 表 加曽利貝塚の発掘調査史

千葉市関連発掘以前								
No.	区 分	地点名称	調査年	年 号	地点説明	備 考	調査主体	
前01		遠足会1907地点	1907	M40		坪井正五郎・大野雲外・石田収蔵・江見水陰・水谷幻花	東京人類学会	
前02		人類1907地点	1907	M40		坪井正五郎・石田収蔵・松本瞭	東京帝国大学人類学教室	
前03		江見1908地点	1908	M41		江見水陰	個人	
前04		人類学会遠足会1915地点	1915	T04		上羽貞幸・長谷部言人・小金井良精・江見水陰・石田収蔵	東京人類学会	
前05	南貝塚	大山1922地点	1922	T11	B 地点	A・B・C・D地点測量・大山柏	個人	
前06		上羽1923地点	1923	T12		上羽貞幸	個人	
前07		上羽1924地点	1924	T13		上羽貞幸	個人	
前08	北貝塚・南貝塚	人類学会1924a地点	1924	T13	B・D・E 地点	小金井良精・松村瞭・八幡一郎・甲野勇・山内清男・宮坂光次	東京帝国大学人類学教室	
前09		人類学会1924b地点	1924	T13		小金井良精・松村瞭・八幡一郎・甲野勇・宮坂光次	東京帝国大学人類学教室	
前10		学術会議1925地点	1925	T14		汎太平洋学術会議・小金井良精・松村瞭・八幡一郎・甲野勇・宮坂光次	汎太平洋学術会議	
前11	南貝塚	史前学会1928地点	1928	S03	A 地点	宮坂光次・池上啓介・竹下次作	史前学会	
前12	南貝塚	早高1934地点	1934	S09	C地点か	(加曽利古山貝塚) 西村真次・大宮守誠・武田宗久	第一早稲田高等学院史学部	
前13		早高1935地点	1935	S10		大宮守誠・武田宗久	第一早稲田高等学院史学部	
前14	南貝塚	早高1936地点	1936	S11	C地点	池上啓介・菊池義次	第一早稲田高等学院史学部	
前15	南貝塚	史前学会遠足会1936地点	1936	S11	B 地点	大山柏・竹下次作・池上啓介・大給尹・土岐伸男・大塚磐雄	史前学会	
前16	南貝塚	早高1937地点	1937	S12	B 地点	藤澤宗平	第一早稲田高等学院史学部	
前17		椎名1949地点	1949	S24		椎名仙卓	個人	
前18		國學院1949地点	1949	S24		椎名仙卓・麻生優	個人	
前19	北貝塚	明大1958地点	1958	S33	E 地点周辺	杉原荘介・芹沢長介	明治大学考古学研究室	
千葉市関連発掘以降								
地点No.	区 分	地点名	調査次	調査年	年 号	備 考	調査面積 (㎡)	調査主体
01	北貝塚	1-1 区 (第 1 地点)	第 1 次	1962	S37	北貝塚第 1 調査区一部	84.25	千葉市教育委員会
02		1-2 区 (第 2 地点)				人骨 5 体を伴う住居	25.5	
03	南貝塚	第Ⅰトレンチ	第 2 次	1964・65	S39・40	南貝塚保存のための確認調査	326.6	加曽利貝塚調査団
04		第Ⅱトレンチ					324.2	
05		第Ⅲトレンチ					161.2	
06		第Ⅳトレンチ					274.4	
07		第Ⅴトレンチ					261.6	
08		第Ⅵトレンチ					264.65	
09		11 区				面的調査、途中で中止	-	
10	北貝塚	1-1 区 (第 1 住居址群)	第 3 次	1965	S40	住居群観覧施設 第 1 住居跡群	200	加曽利貝塚調査団
11		1-1 区 (Dトレンチ)					40	
12		2 区 (第Ⅱ住居址群)				住居群観覧施設 第 2 住居跡群	224	
13	北貝塚	3 区・Aトレンチ	第 4 次	1966・67	S41・42	貝層断面観覧施設	56	加曽利貝塚調査団
14		3 区・Bトレンチ					56	
15		3 区・Cトレンチ					237.35	
16	北貝塚	4 区Ⅰトレンチ	第 5 次	1968	S43	ケーブル埋設	156.5	加曽利貝塚調査団
17		3 区Ⅱトレンチa					33.4	
18		4 区Ⅱトレンチb					40	
19	東傾斜面	北東部 1 区・東傾斜面 1 次 (旧北貝塚 5 区)	第 6 次	1968	S43	旧大須賀家住宅移築	364	加曽利貝塚調査団
20	東傾斜面	南東部	第 7 次	1970	S45	市立老人ホーム建設	432	千葉市教育委員会 (調査委託先 加曽利貝塚調査団)
21		東傾斜面 2 次		1971	S46		2035.5	
22		東傾斜面 3 次		1971	S46		1803	
23		東傾斜面 4 次		1972	S47		1,248.5	
24	東傾斜面	北東部 2 区・東傾斜面 6 次 (旧北貝塚 6 区)	第 8 次	1973	S48	防火貯水槽設置	574.5	千葉市教育委員会 (調査委託先 加曽利貝塚調査団)
25	南貝塚・東傾斜面	史跡整備・試掘	第 9 次	1986-88	S61-63	試掘 a～j トレンチ、植栽 (100数十か所あり)	300	千葉市教育委員会
26	南外縁部	史跡整備・第 1 調査区	第 10 次	1989-90	H1・2	植生復元	353.25	千葉市教育委員会
27	南貝塚	史跡整備・第 2 調査区				南貝塚貝層断面観覧施設	180	
28	東傾斜面	史跡整備・第 3 調査区				復元住居設置	433	
29	南外縁部	2 次	第 11 次	1984	S59	県営桜木第二団地	2,200	千葉県文化財センター
30	西外縁部	1 次	第 12 次	1977	S52	工事立会い等	-	千葉市教育委員会
31		2 次		1978	S53		4.8	
32		3 次		1980	S55		100	
33		4 次		1989	H01		30	
34	北外縁部	試掘	第 13 次	1983	S58	宅地造成	200	千葉市教育委員会 (調査委託先 千葉市埋蔵文化財調査センター)
35		1 次		2012	H24	範囲確認・市内遺跡	156	
36		2 次		2014	H26	範囲確認・市内遺跡	416	
37	南貝塚	保存目的の調査	第 14 次	2017-19	H29-R1		700	千葉市埋蔵文化財調査センター
38	南貝塚ほか	史跡整備に伴う確認調査	第 15 次	2019	R1	南貝塚園路ほか	503.7	千葉市埋蔵文化財調査センター
	北貝塚			2020	R2	北貝塚住居跡観覧施設周囲	8.2	
	東傾斜面			2020	R2	東傾斜面園路	21.1	
39	南貝塚	保存目的の調査	第 16 次	2020-22	R2		1,892	千葉市埋蔵文化財調査センター
	東傾斜面			2020	R2		36	
	南貝塚西			2021	R3		25	
	南貝塚			2022	R4		32	
40	西外縁部	確認・本調査	第 17 次	2022	R4	個人住宅建設	12.4	千葉市埋蔵文化財調査センター
41	北貝塚	保存目的の調査	第 18 次	2023	R5		500	千葉市教育委員会生涯学習部文化財課
延べ面積							17,327 ㎡	

加曽利E式の表記について

大正期から現在に至るまで、数多くの研究者が加曽利E式土器の細分案を提示してきました。

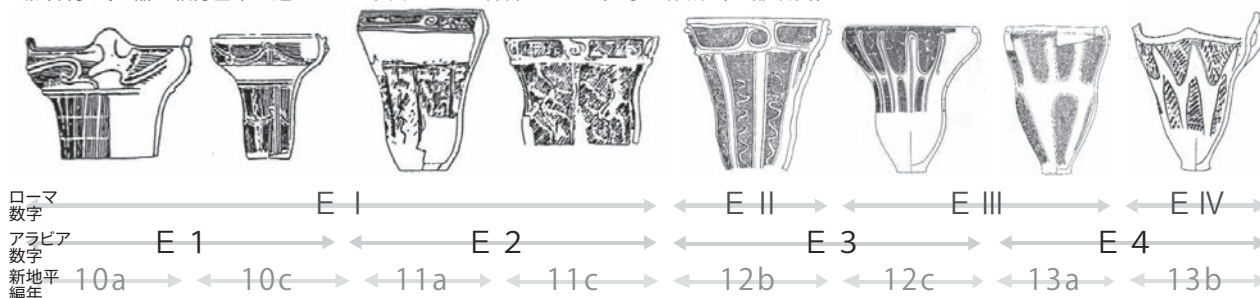
加曽利E式土器は、古い時期から新しい時期まで、4つの時期に細分することが一般的ですが、細分の基準は研究者によって異なります。

どこで細分するかという基準が異なると、表記も異なります。

代表的な表記の方法には、ローマ数字によるものと、アラビア数字によるものの、ふたつがあります。

当館が示す加曽利E式土器の細分と表記は、千葉市教育委員会が2017年に刊行した『史跡加曽利貝塚統括報告書』に準拠しています。当館の表記と、学界で代表的な表記の対応を下の表に示します。

加曽利E式土器の細分基準の違い ※米田1980・谷井1982を参考に作成（一部改変）



加曽利E式土器の細分・表記の対応 ※大内2008をもとに小林2019を加え作成

加曽利貝塚 総括報告書	勝坂・ 阿玉台末 ／加曽利E初		E I				E II				E III		E IV
ローマ数字 (岡本ほか1965)	E I				E II				E III		E IV		
アラビア数字 (山内1969)	E 1			E 2				E 3			E 4		
埼玉編年 (谷井ほか1982)	IXa		IXb	X		XI	XIIa		XIIb	XIII	XIV		
新地平編年 (黒尾ほか1995)	9c	10a	10b	10c	11a	11b	11c1	11c2	12a	12b	12c	13a	13b
実年代幅 (小林2019)	40年	20年	40年	30年	45年	45年	20年	20年	30年	100年	60年	25年	25年

※中峠諸類型は勝坂・阿玉台末／加曽利E初に含まれます。

参考文献

- 石井 寛 2012『加賀原遺跡 佐江戸8遺跡』（公財）横浜市ふるさと歴史財団
- 岡本 勇ほか 1965「縄文文化の発展性と地域性—関東—」『日本の考古学』Ⅱ 河出書房新社
- 山内清男 1969「縄文草創期の諸問題」『MUSEUM』224号 東京国立博物館
- 米田明訓 1980「南信天竜川沿岸における縄文時代中期後半の土器編年—所謂「唐草文土器を中心として」—」『甲斐考古』17巻第1号 山梨県考古学会
- 谷井 彪ほか 1982「縄文中期土器群の再編」『研究紀要 1982』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 大村 裕 1998「勝坂V式・阿玉台IV式から加曽利E式への転換期の諸問題」『下総考古学』15 下総考古学研究会
- 大内千年 2008「千葉県における小規模集落の分析—中期後葉土器編年に関する補足・市原市中潤ヶ丘遺跡の事例を手がかりに—」『縄文研究の 新地平（続）～堅穴住居・集落調査のリサーチデザイン』株式会社六六書房
- 黒尾和久ほか 1995「【前提1】多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」『シンポジウム 縄文中期集落研究の新地平（発表要旨・資料）』縄文中期集落研究グループ 宇津木台地区考古学研究会
- 小林謙一 2019『縄文時代の実年代講座』株式会社同成社
- 千葉市教育委員会 2017『史跡 加曽利貝塚 総括報告書』

令和 6 年度加曽利貝塚 E 地点・B 地点発掘 100 周年記念シンポジウム

加曽利 E 式土器の再検討

2024 年 11 月 23 日発行

編集・発行 千葉市立加曽利貝塚博物館

印刷 株式会社 ニッセイアド

本予稿集の文章・図版等の無断転載及び複製等をご遠慮ください。